既定の場面的状況と人物の存在認知

— 英語の it + is + 名詞句構文の意味特性 —

大竹芳夫　言語教育講座

キーワード: It + is + 名詞句構文, 分裂文, there 構文, it の指示特性

1.　はじめに

英語の談話においてしばしば観察される表現形式に、次のような"it is"が名詞句を従える構文がある。

(1)　a. After he was gone, <u>it was just the passenger and me</u>.

(L. Heitman, *Hard Landing*)

b. Luckily, the eldest is out being antisocial with his friends, so <u>it's just the four of us</u>.

(*The Observer*, March 17 2002)

c. Mrs. Bush: Not quite like running for President.

Q: Well, I guess not, no. But, I mean, how –

Mrs. Bush: George was driving. [Laughter.] <u>It was the two of us in the car</u>.

(http://www.whitehouse.gov/news/releases/2004/05/20040519-18.html)

(1a)は「彼が出て行った後、その場はその乗客と私だけになった。」といった意味を表わし、(1b)は「うまいことに最年長者が友人と仲違いとしてここにいないので、この場は私たち四人だけだ。」といった意味になる。(1c)では選挙戦の様子が車の運転にたとえられており、ブッシュ大統領夫人の発話は「ジョージが運転していたのです。車内は二人だけだったのです。」と解釈される。(1a-c)の構文において"it is"が人物を表わす名詞句"the passenger and me"、"the four of us"、"the two of us"を従えるように、この構文は文脈や会話中の場面でその存在が知覚・認識される主に人物を描写するところに特徴がある。本研究では談話で頻用されるこうした構文を it + is + 名詞句構文と呼び、実際の言語データの観察と分析を通じて、従来の研究では十分に論ぜられてこなかったその意味特性について考察する。

2.　先行研究での考察

本研究対象の it + is + 名詞句構文は、Quirk *et al.* (1985)や Huddleston and Pullum (2002)などの記述文法書での説明は見当たらず、これまでの研究において詳しくは分析されてこなかったように思われる。(1)で提示した it + is + 名詞句構文は、次例で下線部を付したような前提節が省略され、焦点位置に名詞句が現れる it 分裂文(*it*-cleft)と表面的には同じであるように見えるかもしれない。

(2) A: It was your father who was driving.
B: No it wasn't, <u>it was me</u>.

(Huddleston and Pullum (2002))

Huddleston and Pullum (2002)は、(2)の話し手Bの発話中の"it was me."はit分裂文であると分析し、itは実質的な意味内容をもたないダミー要素であり「運転していたのは(who was driving)」という前提節を補って意味を解釈できると説明する。伝統的な記述文法書であるQuirk *et al.* (1985)もまたit分裂文の前提節が省略される現象を指摘し、Huddleston and Pullum (2002)と同様の説明を与えている。

(3) The bell rang, and I went to the door. <u>It was Dr Long</u>.

(Quirk *et al.* (1985))

(3)は「呼び鈴が鳴ったので、私は玄関に行った。いらしたのはロング先生だった。」といった意味を表し、it分裂文は呼び鈴の音の正体を同定している。Quirk *et al.* (1985)は(3)に対して次の(4)のような前提節の"who had rung the bell"を補った形の書き換えを与えている。

(4) It was Dr Long (*who had rung the bell*).

(Quirk *et al.* (1985))

Prince (1978)はit分裂文を「強勢を伴う焦点もつ分裂文(stressed focus *it*-cleft)」と「情報を与える前提を含む分裂文(information-presupposition *it*-cleft)」とに分類し、強勢を伴う焦点もつ分裂文のthat節は情報価値が低いために省略されることが多いと指摘する。

(5) Who made this mold? <u>Was it the teacher</u>?

(Prince (1978))

本研究対象のit + is + 名詞句構文をこのような前提節の省略されたit分裂文と関連付ける立場をとるならば、形式的には文頭のitは意味の無い虚辞と分析されるし、意味的には人物を表す名詞句は省略された前提節の叙述によって唯一的に指定される焦点要素と解釈されることになるであろう。しかしながら、本研究で検証するようにit + is + 名詞句構文のitは意味内容をもたない虚辞要素ではなく、話し手の意識の中ですでに問題となっている場面的状況を指示していると分析できるし、"it is"に後続する名詞句は前提節の叙述により指定を受ける焦点要素ではないと考えられる。

Otake (2002)、大竹 (2004)で確認したように、itにはある命題が話し手の知識において情報としてすでに確定していることを積極的に合図するという意味特性がある。It + is + 名詞句構文におけるitも話し手の意識の中ですでに問題となっている場面的状況、つまり話し手の眼前の状況や文脈中の情報により十分に確定済みの具体的な場面を指示する機能を果たす表現であると仮定しながら、次節以降では本構文の具体的な意味特性を考察する。

3. 基本的意味

It + is + 名詞句構文の文頭の it は意味内容をもたない虚辞要素ではなく、話し手の意識にすでに上っている場面的状況を指示していると考えられる。それは、Bolinger (1977)が説明する話し手の想定する場面や出来事を指示する it と共通の特性を有するものと分析できる。Bolinger (1977)は次のような it を環境の'it'(ambient *it*)と呼び、その興味深い特性を指摘している。

(6) a. I can't walk. It's oozing oil over here! Look at my shoes!
b. Get away from there; It's too dangerous. Look at the way it's shooting sparks.
c. Come down here in the basement and look at the way it's dripping water from every pipe. You'd swear they were leaks, but it's just condensation.
(Bolinger (1977))

(6a)は「歩けない。このあたり一面に油が漏れている。私の靴を見てごらん。」、(6b)は「そこから逃げなさい。非常に危険です。火花が飛び散っているのを見てごらん。」、(6c)は「地下に降りてきて、どのパイプからも水が滴っているのを見てごらん。水漏れに見えるかもしれないけれど、ただの結露だよ。」といった意味を表わす。Bolinger (1977)は、天候や時間と同様に一定の名詞や副詞を加えることによって明白な環境性さえ特定化されれば、(6)のように場面や出来事も it で指示できると主張する。さらに、Bolinger (1977)は、it は天候、時間、距離、状況のみならず現実のありようや文脈の含みから得られる言外のニュアンスをも指示できると論ずる。

Bolinger (1977)は本研究の考察対象である it + is + 名詞句構文については取り上げてはいない。しかしながら、その意味特性を分析すると it + is + 名詞句構文もまた、文脈や会話中において話し手の意識にすでに上っている場面的状況を指示する it を文頭に据える構文であると仮定できる。ここで、実際の言語資料に現われる it + is + 名詞句構文を観察しながら意味的な特徴について考察しよう。

まず、場面的状況が話し手に強く意識されるのは、それ以前の場面的状況からの変化が知覚・認識されるような場合である。(7)では、話し手を取り巻く場面から誰かが離れることによって変化を受けたと認知される場面的状況が it で指示されている。

(7) a.(=(1a)) After he was gone, it was just the passenger and me.
(L. Heitman, *Hard Landing*)
b.(=(1b)) Luckily, the eldest is out being antisocial with his friends, so it's just the four of us.
(*The Observer*, March 17 2002)

(7a)は「彼が出て行った後、その場はその乗客と私だけになった。」と伝えていることから、話し手は彼が出て行った後の場面的状況を it で指示しながら描写しているし、同様に(7b)も

「うまいことに、最年長者が友人と仲違いとしてここにいないので、この場は私たち四人だけだ。」と年長者が出て行った後の変化が認識された場面的状況を it で指示して表現している。次の(8)の例も引き続き観察しよう。

(8) Max: When we came out of the pods and we lost Michael, <u>it was just the two of us in the desert</u> and I knew that I wasn't alone - that I had my sister. To me, earth isn't home and whatever's out there isn't home but you're my home.

(*Roswell* (1999)の台詞)

(8)は「ポッドから外に出て、そしてマイケルに死なれ、砂漠には私たち二人だけとなったのだ。」という意味を表わす。つまり、マイケルの死という事態を受けて、話し手の意識に上っている砂漠という場面的状況において自分たち二人だけになったという変化を認識した様子が描写されている。この例においても、it + is + 名詞句構文は話し手が意識中の状況の変化を認識する場面で発話されていることがわかる。

さらに、(9)では now に導かれて it + is + 名詞句構文が提示されていて、話し手が以前の状況との比較・対照を意識しながら現況を知覚・認識していることが確認できる。

(9) a. Fez: Ah, they have finally left. <u>Now it's just the three of us</u>.
Eric: That's great, Fez.
Fez: Oh, I get it. If I was gone you two would kiss. Ah, life's a bitch, huh?

(*That '70s Show* (1998)の台詞)

b. "There used to be others in our riding group, <u>but now it's just the three of us</u>," said Atwood.

(*Herald-Tribune*, November 23, 2005)

(9a)は会話の参与者の知り合い全員がちょうど帰った場面での発話であるが、「今ここに残っているのは私たち三人だけだ。」と現在の場面的状況を it で指示して表現していることが明らかである。(9b)は話し手が自転車乗りのグループから仲間たちが抜けて変化を受けた現状を受けて「今やグループは三人だけになった。」と話し手の意識に上っている自転車乗りグループの現在の状況が認識されて表現されている。

上記の(7)-(9)は、話し手を取り巻く過去の場面から誰かが離れることによって変化を受けた場面的状況を話し手が知覚・認識するような発話であった。しかし、場面的状況が話し手に強く意識されるのは、それ以前の場面的状況から誰かが離脱することによる変化が知覚・認識されるような場合だけではない。次のような例では、文脈や会話中の当該場面に新たな人物が登場したために状況変化が認識され、it + is + 名詞句構文が用いられている。

(10) a. Rashid waves from across the Tarmac and points to a red aeroplane - he tells me to sit in the co-pilot's seat while he goes elsewhere. Joseph, the pilot, joins me - it's just the two of us, and we climb to 7,500ft to look down on a wonderful blue world.

(*The Guardian*, October 19, 2002)

b. On Thursday, Betty had called me at my apartment, and told me she had wanted me to cook something. And I cooked it and she came and it was the two of us and it was great.

(*The Guardian*, May 25, 2002)

(10a)は、飛行機のコックピットという場面空間が話し手の意識にすでにあり、そのコックピット内に操縦士のジョセフが入った後の場面的状況を「コックピットは私たち二人きりだった。」と表現している。(10b)は、it + is + 名詞句構文の先行文脈で言及されているアパートの部屋という場面空間を話し手が意識しながら、ベティーが来た後の場面的状況を「部屋は私たち二人になった。」と伝えている。

さて、it + is + 名詞句構文が言及する場面的状況は、話し手の意識の中ですでに問題となっているのであれば、空間の物理的な広狭にかかわりなく it の指示対象となりうる。この点を次の例で確認しよう。

(11) a. On the jet back to Seattle it was just the three of us.

(*TIME*, June 19, 2000)

b. Loki: You all right man? Your eyes are kinda...
Bartleby: My eyes are open. For the first time, I get it. When that little innocent girl let her mission slip, I had an epiphany. See, in the beginning, it was just us and Him. Angels and God.
Loki: Uh huh
Bartleby: Then he created humans. [...]. (*Dogma* (1999)の台詞)

(11a)では、it + is + 名詞句構文の直前に「シアトルに戻るジェット飛行機には」と表現されていることから、ジェット飛行機の機内が場面的状況として it で指示されていると考えられる。(11b)の it + is + 名詞句構文では、その直前の"in the beginning"は「世界のできたはじめ」を指していると推察され、it は世界を場面的状況として指示し「この世は私たち天使と神様だけの状況でした。」といった意味になる。ジェット機の機内と世界とではその物理的空間の広狭には相当な隔たりが存在する。しかしながら、こうした場面的状況を it + is + 名詞句構文が発話されるという事実は、話し手の意識の中に場面的状況がすでに問題となっているのであれば、その場面空間の広狭とは無関係に it を用いて指示できるということを例証している。

また、実際の言語資料を観察すると、it + is + 名詞句構文が家庭を場面的状況として it で指示しながら描き写す用例も多い。次のような例では、家庭が話題となっていることから話し手の意識中ですでに家庭という場面的状況が問題となっていることがわかる。

(12) a. My parents are divorced and my mum and I are quite close: it has been just the two of us for the past 14 years.

(*The Guardian*, April 13, 2005)

b. Indiana Jones: It was just the two of us, dad. It was a lonely way to grow up. For you, too. If you had been an ordinary, average father like the other guys' dads, you'd have understood that.

Professor Henry Jones: Actually, I was a wonderful father.

(*Indiana Jones and the Last Crusade* (1989)の台詞)

c. I'm the youngest of three sisters; the next one is ten years older than me. So we never had a minivan, because it was just the three of us -- Mom, Dad and me. Our family car was a Chevy Camaro.

(*Reader's Digest*, November 2005)

(12a)では、先行文脈で両親が離婚してから母と自分が関係を密にしている現状を述べた後で、「ここ 14 年間、家庭は母子二人だけだったのです。」と家庭が二人だけであったことを伝えている。(12b)では、後続文脈が家庭のことについて述べられていて、「お父さん、ずっと二人きりだったよね。」と家庭という場面が二人きりであったことを表現している。(12c)では、家族のことについての描写に続き、「家はお母さん、お父さん、私のたった 3 人だった。」と表現されている。

次のような用例でも、話し手の意識の中に自分の家庭がすでに上っている文脈の中で、その家庭が場面的状況として it で指示されて描き写されている。

(13) a. When I was 14, my father died, and the first few Christmases after that didn't seem like proper Christmases. It was just the three of us - my mum, older brother and I - and although I love them all dearly I'd always been a daddy's girl, so it hit me really hard.

(*The Guardian*, December 22, 2001)

b. "We're like an old married couple," said Walter. "It's just the two of us and our cat. We work hard, come home and fall asleep in front of the TV."

(*The Guardian*, August 27, 2003)

(13a)では、話し手に意識されているのは父親が亡くなって以来過ごしてきた過去のクリスマスでの家庭の状況であり、「家にいるのは母と兄と私の三人だけだった。」という意味を表わす。(13b)では、先行する発話で「私たちは老夫婦のようね。」と話し手の現在の家庭が問題となっており「この家にいるのは私たち二人と猫だけよ。」という意味を伝えている。(13b)の用例では、本研究の考察対象の it + is + 名詞句構文には基本的に人間を表わす名詞句が生ずるにもかかわらず、猫が家族の一員として現われていて興味深い。

ここまでは、it の指し示す場面的状況が先行する文脈や会話で指定される例を中心に考察してきた。しかしながら、次のように it の指し示す場面的状況が後続談話で指定される用例も観察される。次例の#マークは談話冒頭であることを示す。

(14) #It was just the two of them, sitting in the dark. Tom Cruise and Nicole Kidman, by themselves in a small screening room in midtown Manhattan last March, watching Eyes Wide Shut, the film directed by Stanley Kubrick and starring the Cruises, naked, in love and at war.

(*TIME*, July 5, 1999)

上記の(14)は「そこは彼ら二人だけだった。暗闇に座っていた。」と解釈できる。(14)は談話の冒頭で it + is + 名詞句構文が用いられている例であるが、文内の「暗闇に(in the dark)」という表現が場所を暗示し、後続文脈中の「マンハッタンのミッドタウンの小さな映写室(in a small screening room in midtown Manhattan)」が具体的な場面的状況を特定している。(14)のように場面的状況が先行文脈で指定を受けない用例は手元の資料を見る限り少ない。しかしながら、(14)の it + is + 名詞句構文の it が指示する場面的状況は直後の談話で確実に保証されていることから、文脈的な効果を狙うために意図的に場所と時間を後述する文体であるとみてよい。以上の事実観察から、it + is + 名詞句構文の使用条件として、it が指示する場面的状況が直前や直後の談話において明確に定まっていなければならないという前提があることが確認される。

また、it + is + 名詞句構文は過去や現在の特定の一場面だけを問題とするのではないことは(12a-c)、(13a-b)の例からすでに明らかであるが、次のような例でも検証しておきたい。

(15) a. It used to be just the two of us. When my partner and I hired a car, I'd navigate and he'd drive; since he has the driving licence and I have the A-level in geography, it seemed a sensible division of labour. In recent times, however, a third party has joined us in the car. She has made my navigational skills almost totally redundant.

(*The Guardian*, September 30, 2004)

b. 'Often it was just the two of us. The trainees would get stressed, which meant they sometimes confused and alarmed the victim. They took things personally, which affected the way they briefed prosecution lawyers,' she said.

(*The Observer*, May 1, 2005)

c. Senator Leahy: And times when Anita Hill, for example, might be in the office and it would be just the two of them and the door would be closed, is that correct?

Ms. Holt: That's correct.

(米国の聴聞会での質問 October 13, 1991 Evening Session
http://www.people.virginia.edu/~ybf2u/Thomas-Hill/1013a08a.html)

(15)のいずれの例も it + is + 名詞句構文では過去の特定の一時点の場面的状況ではなく、習慣的、常習的に成立した状況が表現されている点に注意されたい。具体的には、(15a)では、it + is + 名詞句構文に過去を表わす"used to"が用いられていることから「車の中は私たち二人きりになるのが常だった。」と過去の一定の状況が述べられている。(15b)では、often が共起しており「その場はよく私たち二人だけになることがあった。」と過去にしばしば生じた状況が伝えられている。(15c)では、would が用いられて「職場は彼ら二人だけになるということがよくありましたか？」と過去の習慣的な状況が問題にされている。

さらには、it + is + 名詞句構文は未来の場面を想定して描写することもできる。次のような例では、これから来たる夕食の場面を推測して描写している。

(16) a. 'I'll have the housekeeper fix us dinner,' she said. It'll be just the two of us, I thought.

(*The Observer*, January 21 2001)

b. We were supposed to go to a concert next week with two of her friends, but I just found out that it will be just the two of us.

(http://www.sharpman.com/Article.asp?ArticleID=382)

(16a)では、「「家政婦に夕食を作らせるわ。」と彼女が言った。夕食は私たち二人だけになるだろうにと私は思った。」と表現され、これから始まる夕食という場面的状況が話し手の意識中に想定されている。(16b)では、話し手が来週のコンサートに友人二人と行くものと考えていたが、「私たち二人だけになるとわかった。」と来週のコンサート当日の場面的状況が話し手の意識に上っている。

It + is + 名詞句構文に可能性を表わす法助動詞の can が現われて、話し手の命題に対する心的態度が表現される用例も観察される。

(17) I'm relatively new to DeGroen's, having gone for the first time in fall of 2003. Now, my boyfriend and I go every Friday night, and usually our friends gather and meet us there. It can be just the two of us or end up to be a crowd of 17.

(*Baltimore City Paper*, February 16, 2005)

(17)では、先行文脈中にもうすぐ閉店するお店に関する話題が提示され、it + is + 名詞句構文では「お店のテーブルは私たち二人だけのこともあるし、最後には 17 人のグループになることもある。」と表現されている。(17)の it + is + 名詞句構文の it は毎週金曜日の夜に行く店での話し手を取り囲む場面的状況を指し示し、具体的には話し手の座るテーブルということになる。can は状況の成立の可能性を話し手が判断していることを合図している。

本節で確認したように、it + is + 名詞句構文の it は話し手の意識に上っている場面的状況を指示する。次例では、映画の撮影シーン、すなわち場面が話題として談話に提示された後に、「その場は部屋にまさに三人しかいなかったのです。」と表現されている。つまり、映画のシーンという場面的状況において存在が認知される人物が描写されているのである。

(18) GC: We did scenes where there was not even a focus puller, it was literally just the three of us in a room. As an actor, that's a great thing, [...]
(http://film.guardian.co.uk/interview/interviewpages/0,,897475,00.html)

最後に、次のような例を観察しよう。

(19) Gina: 'I'm just gonna miss you, that's all. It's been the two of us for such a long time.'
Joey: 'Yeah, well, now it's the three of us.'
(*Episode 101 The Pilot* の台詞)

(19)は「今までずっと長い間私たち二人だけだったね。」「でも、もう三人になったんだよ。」という会話であるが、現在完了と単純現在を伴う it + is + 名詞句構文が連続して使用されている。談話の参与者の二人を取り巻いている同じ場面的状況に対して、一人は以前の状況と関連付けて現況をとらえているがもう一人は現在の状況のみに目を向けており、お互いの異なる認識が表現されていて興味深い。

4. There 構文との相違

本研究対象の it + is + 名詞句構文は場面的状況と関連付けて人物の存在を表現するという点で存在を表す there 構文と類似した意味を表わすように思われるかもしれない。しかしながら、実際には両構文は談話において棲み分けて使用されている。本節では、it + is + 名詞句構文と there 構文の相違について分析する。

まず、一見すると次のような there 構文は人物の存在を表わしており、it + is + 名詞句構文と似ているように思われるかもしれない。

(20) a. In the food mall leading to the box office, the Old Orleans bar is fairly busy but there are just three diners in Mamma Amalfi's Italian restaurant.
(*The Guardian*, February 20, 1999)

b. Right now, at 6.53am, there are just three of us in the room: me, the instructor, and a tracksuited man grunting his way around the spacious hall in what I can only describe as a Caveman Strut.
(*The Observer*, April 28, 2002)

(20a)では there 構文が使用されており「切符売り場に続く食堂街で、Old Orleans バーはかなりこんでいるが、Mamma Amalfi's イタリア料理店は食事客が三人しかいない。」という意味を、(20b)は「三人だけがその部屋にいる。」という意味をそれぞれ表わす。It + is + 名詞句構文では、話し手がすでに視界に入っている人物やその存在に気づいている人物をあらためて場面的状況と関連付けて表現する構文であるため、定性制限(definiteness restriction)は適用されない。

(21) He is out, so it is {the three of us /*three of us}.

しかしながら、(20a)のような there 構文では、いわゆる導入の'there'(introductory *there*)が用いられて、話し手や聞き手の視界にない事物が意識の中に上っている。そのため、(20a)の there 構文は新情報を担う"three diners"が真主語位置に生じて定性制限が課せられている。さらに、it + is + 名詞句構文では話し手の意識においてある場面的状況がすでに問題となっており、その場面的状況が描写される。ところが、there 構文では基本的に発話に先立って場面は設定されておらず、事物の存在と存在を位置づける場面空間とが同時に提示される。実際に(20a)の there 構文は場所を表わす前置詞句"in Mamma Amalfi's Italian restaurant"を伴い、真主語の指示対象の存在を位置づける場面がはじめて聞き手に提示されている。たしかに、実際の用例を観察すると it + is + 名詞句構文が場所を表わす前置詞句を伴う事例が、まれではあるが見受けられる場合がある。議論の都合上、(22a)、(22c)は既出例を再掲し、(22b)は(23)を先取って一部引用する。

(22) a.(=(1c)) George was driving. [Laughter.] <u>It was the two of us in the car</u>.
b.(=(23)) We were invited to the Kremlin and we were sort of dropped off on our own and taken through these corridors, endless corridors. [...] And he eventually got rid of the translator, so <u>it was just the three of us in the room</u>. [...].
c.(=(8)) When we came out of the pods and we lost Michael, <u>it was just the two of us in the desert</u> and [...].

しかしながら、it + is + 名詞句構文に生ずる場所を表わす前置詞句は、すでに話し手の意識の中で問題とされている場面的状況について補足的に追記されているに過ぎない点に注意されたい。(22a)では「車中は(in the car)」と表現されてはいるが直前の先行文脈に「ジョージが運転していたのです(George was driving)」と明記されているため、話し手の意識に上っている場面的状況が車中であることは自明であるし、(22b)では「部屋に(in the room)」と前置詞句が現れてはいるが先行文脈にクレムリン宮殿に招待されて長い通廊を話し手が歩いてきたことが示されているため、場面的状況が部屋の中であることは明らかである。また、(22c)においても先行文脈で宇宙船のポッドから出てきたことが述べられていて、話し手の意識の中にはすでに「砂漠」という場所空間が意識されていることが確認できる。

最後に、次に示すような it + is + 名詞句構文と there 存在文との意図的な使い分けが行われている用例を観察しよう。

(23) MCCARTNEY: We did. It was fantastic. We were invited to the Kremlin and we were sort of dropped off on our own and taken through these corridors, endless corridors. And we met with him and at first there was a bunch of press and photographs and cameras and things and then they eventually went, and it was just me, Heather, Vladimir Putin and his translator. And he eventually got rid of the translator, so it was just the three of us in the room. It was very nice. [...].

(CNN Larry King Live, September 13, 2003)

興味深いことに、(23)では下線を付した二つの it + is + 名詞句構文の使用に先立って波線を付した there 構文が用いられている。(23)はクレムリン宮殿の長い通廊を通って来た話し手が「最初は報道記者、カメラ、テレビカメラ、放送機材なんかがごちゃごちゃといましたが、みんな出て行った後、その場は私とヘザーとプーチンと彼の通訳だけでした。そして、彼が通訳を帰らせると、その場に残ったのは私たち三人だけでした。」と伝えている場面である。はじめの there 構文は、話し手が眼前で報道記者、カメラ、テレビカメラ、放送機材をはじめて知覚し、その存在を伝える構文である。一方、後続する二つの it + is + 名詞句構文はすでに話し手の意識に上っている場面空間についての認知された変化を描写している。このように it + is + 名詞句構文は there 構文と類似した意味を表わすように見えるが、実際には両構文は談話において棲み分けて使用されていることが明らかになった。

5. まとめ

本研究では従来の研究では詳しく論ぜられることのなかった英語の it + is + 名詞句構文の意味特性について考察した。It + is + 名詞句構文は話し手の意識の中ですでに問題となっている場面的状況について、その場に存在する人物を描写する表現形式であることを実際の言語資料に基づいて検証した。また、there 構文の真主語には定性制限が課せられるのに対して、it + is + 名詞句構文の人物を表す名詞句には定性制限は適用されないこと、さらに there 構文は事物の存在とともにそれを位置づける場面空間も新たに明示されるのが基本的な特徴であるの対して、it + is + 名詞句構文にはそうした特性が認められないことについても詳しく論じた。

References

Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form.* London: Longman.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English.* Tokyo: Kaitakusha.

Huddleston, R. and GK. Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of the English language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Otake, Y. (大竹芳夫) 2002. "Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction." In Ionin, T., H. Ko and A. Nevins eds., *MIT Working Papers in Linguistics.* Vol. 43, 143-157. Cambridge, Mass.: MIT, Department of Linguistics and Philosophy.

大竹芳夫. 2004. 「S+take+it+that 節構文の意味と談話機能」 『英語語法文法研究』 第 11 号（英語語法文法学会編）, 79-93. 東京: 開拓社.

Prince, E. 1978. "A Comparison of *Wh*-Clefts and *It*-Clefts in Discourse." *Language* 54:4, 883-906.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

安井稔（編）. 1996. 『コンサイス英文法辞典』 東京: 三省堂.

(2005年12月14日 受理)